

うなるか誰にもよくわからない維新直後の東の間のエポック
 ットの時代に、このようにして大衆は、西洋の科学技術思想の
 洗礼を受け、フランス・ペコン以来の西洋近代思想、すな
 わち、自然を合理的に捉えそれらについて自然の力を使役す
 るという、今まで馴染みの薄かった自然の見方、自然への対処
 の仕方、上り方面であれ、知ったのである。

そしてそれは、その後の明治新政府の進める「殖産興業・富
 国強兵」の回踏へと大衆を誘う入り口となった。先述の東井の
 「醒理日新發明記事」は「土地を開き産物を盛にして國家を富
 強ならしむは、必ず器械の運動と汽力の機関とを用て、人力を
 省き、費を減じるに有り」と始まる。福沢の「西洋事情」も、
 第三篇には「我日本國人も今より學問に志し、……随つて一國
 の富強を致すことあらば、なんぞ西歐人の力を恐るに足らん」
 とある。武田の哲に言うように、「醒理アームは泰西物質文明
 を庶民に開眼させるのに大いに役立つ」だけではなく、「こ
 れはまた殖産興業・富強兵を軌道に乗せ、日本の資本主義の
 發達の大きな基礎となった」のである。

(やまとよしたか 慶享予備学校講師)

編集部より

☆岩波講座 日本歴史 第16巻 近現代2をお届けいたしま

す。次回配本は、第8巻中世3(二〇一四年八月発売予定)です。

日本歴史

目録 8

歴史叙述とジェンダー史

姫岡とし子

私の専門はドイツのジェンダー史だが、ドイツで、そして日
 本の西洋史分野で女性史研究が登場するようになったのは、私
 が博士課程に在学中の一九八〇年代はじめのことだった。私の
 本格的な研究生活の開始時期は、ちょうど西洋女性史の興隆期
 と重なっていて、期待に胸を躍らせながら新しく刊行される研
 究成果を讀んでいたことが思い出される。そのなかには、従来
 の政治史中心または男性中心の歴史叙述からのパースペクティ
 の転換を唱える綱領的な女性史論文もあった。そこでは、これ
 まで不可視であった女性の歴史を可視化すること、そして、そ
 の成果を織り込んで、これまで男性を基準としながらも一般史
 あるいは全体史と称してきた歴史研究を書き直すことの必要性
 が熱く語られていた。女性史研究の目的は、決して既存の研究

に女性を付足すことではなく、既存の研究の書き直しにあつ

ただ。

その時から、一般史の書き直しは私にとっても大きな目標と
 なった。といっても、その課題は大きすぎて私の能力の及ぶと
 ころではないし、まだ一個人の力だけで果たせるものでもない。
 私がしたことといえば、個別テーマのなかで女性を可視化する
 ための研究、さまざまな場で女性の視点導入の重要性を主張す
 ること、そして歴史学全体のなかに、どの程度女性史研究の成
 果が反映されているかを注視することであつた。

ここ数年來、私は日本学術会議の「中学委員会・歴史学とし
 ジェンダー」の問題に取り組むようになり、あらためて女性
 史・ジェンダー史と全体的な歴史叙述との関連について考えて
 いる。女性史・ジェンダー史の研究蓄積は膨大になっているの
 に、残念ながら、その成果が歴史教育に浸透しているとはいえ
 ない。高等学校の日本史と世界史の教科書を調べてみると、な
 かにはジェンダーを意識した内容のものもあるが、全体として
 ジェンダー関連の記述はまだまだ少なく、とりわけ、テーマを

歴史叙述とジェンダー史
 文明開化の窮理熱
 山本義隆 4

姫岡とし子 1

第16巻 二〇一四年六月 岩波書店

【お詫び】前回配本の第11巻近世2の一部において、奥付頁
 【執筆者紹介】の村澤直秀氏の御名前の読み間違いがござ
 いました。正しくは、「ほろざわ なおひで」です。関係
 者の皆様に深くお詫び申し上げます。(岩波書店編集部)

設定した形の叙述ではなく、通史を基調として執筆された教科書にはジェンダーへの配慮が欠けていることがわかった(長野ひろ子・姫岡とし子編『歴史教育とジェンダー』青弓社、二〇一一年参照)。

権力者を中心とする政治史や「ジェンダーとは関係なく」進展すると考えられている経済の變化を中心とする通史は、教科書で歴史を学ぶ生徒を含めて多くの人に「これこそが歴史」と捉えられ、その意味で「正史」の位置づけをもっている。「歴史講座」も「歴史像」と「歴史の見方」を示すうえで大きな影響力をもっているといえるが、この「歴史講座」でもジェンダーが歴史叙述の確固たる一翼を占めるにはいたっていない。この月報が挿入される『岩波歴史日本歴史(全22巻)でジェンダー関連のタイトルは、古代、中世で「家・家族と女性」に関してそれぞれ一本ずつ、近世では「性」の一本、近現代については「学校教育制度の確立、戦間期、戦後史と関連する三本である。他に「歴史学の現在」の巻の「女性史/ジェンダー史」を含めて合計七本、二〇〇を超える全タイトルの三%強にすぎない。一九五年の『岩波歴史日本通史』では、古代と中世で一本ずつ、近世では「百姓の家と家族」「性の文化」「文字と女性」の三本、近現代で二本、別巻で三本が掲載されていた。少くもこれといふ今の方が減少しているのである。また、「日本通史」では、タイトルにとくに女性が表示されていなくても、女性に関する記述を含む論文も見られた。とはいえ、各巻の最初におかれてある通史では女性に関する記述は極端に少なく、

グラミングされていて、歴史の主流から孤立した扱いとなつている。

女性史が歴史の書き換えを主張した三〇年以上前と今では、歴史研究をめぐる状況はまったく異なっている。当時女性史は女性と男性という二つの歴史主体を前提としていたが、その後女性史が、民族や階層による違いなど同じ女性間での差異への着目を要請されてジェンダー史へと變化していったように、歴史の主体は多様化している。また方法論的にも、女性史・ジェンダー史への追い風となった社会史や日常生活史、さらに文化史に加えて、ポスト・コロニアリズム、グローバルヒストリーやランスナショナルな関係史など、多くの潮流が登場している。歴史にはこういう見方もある、この視点から見れば、歴史はこう見える、とはいえても、社会史がメインストリームに躍り出たようなほどの勢いもつた八〇年代とは違つて、一つの歴史が中心的になるといふより、さまざまな歴史が併存しているのが現状だ。そのようななかで、あるいはそのような状況だからこそ、そういうべきか、オポントクスの政治史が勢いを盛り返し、通史のような「一つの歴史」を奪くさいには、相変わらず政治や経済をめぐる支配権力や制度の變遷が中心となつて、多様な歴史は影が薄くなるのである。

歴史の見方が複層化するなかで、ジェンダー史が、初期の女性史のように「人口の半分は女性なのだから、歴史叙述においてそれぞれ相應の扱いを」といったナイーブな主張を掲げることにはもはや不可能だ。それでもジェンダー史は、多様な歴史叙述

このでも政治史や経済史を中心とする通史とジェンダー史との折り合いの難さが示されることになった。

しかし、私が「歴史講座」のなかで女性史・ジェンダー史の扱ひ方に注目したのは、たんに「少なすぎる」と批判するためだけにではない。私が「歴史講座」の目次を見て考えさせられたのは、ジェンダー史が歴史叙述全体のなかで、どういう扱いを受けるべきかという主張と同時に、どのような位置を占めることができるのか、という問いでもあった。

『日本通史』の編集方針の「天皇論 都市論 法と慣習、家」と女性の四テーマについては、古代から近代・現代までの各時代に一項目以上を立て、時代間の構造の變化の過程をたどることができるといふような、あるいは「ジェンダー史の認識を組む」といふ形が叙述がなされていなければならないように、女性史が当初めざしたパラダイムの轉換、すなわち一般史の書き換えては全く、構想という形なのである。今回の「歴史講座」でも、またその他多くの著作においても、女性史は「ある時代・文化をどう生きたか」といって、全体の二〜三割、部分史としてアプロ

の一角を占める部分史でいいのか、それしかないか、という問いについては、やはり否と答えた。

女性の体験を記すだけでなく、それを含めて歴史全体を書き換えること、という課題に女性史・ジェンダー史はある程度は答えてきた。たとえば公的福祉制度に注目していた福祉の歴史は、ヴォランティアを基軸とする女性の活動の可視化によって、そのパイアスが是正され、福祉の複合性が明らかにされている。労働に関しては、かつては男性の労働を基準とした公的な場での獲得労働が中心だったが、女性が従事していた家内での生産にかかわる労働が可視化されたことにより、労働の概念をもっと幅広くとらえるよう修正の要求がなされている。ただし、こちらは、歴史叙述全体のなかで、まだ福祉ほどの扱いを受けるにはいたっていないが。

だが、こうした女性の活動が、「女性はどう生きたか」という章の孤立した文脈で扱われると、男女の活動領域の違いがいかんとして成立し、そこにどのような意味が付与され、歴史のなかでどのような役割を果たし、その背後にあった権力関係はどのようなものだったのか、ということとは明らかにならない。私

が専門とする近代史では、まさに男女の差異化が、またその結果として形成されたジェンダーとしての「男らしさ」や「女らしさ」が、市民社会、機械工場生産、国民国家に象徴される近代社会を編成する基本原理として作用していた。だからこそジェンダー史は、歴史の行方の決定要因の一つとしてジェンダー

111 男女の差異化を取りあけるのだ。それゆえ「歴史講座」など、

歴史の全体を明らかにしようとする企画では、女性を孤立した文脈だけで扱うのではなく、それ以外の項目のなかにもジェンダーの視点を入れた記述を含めて欲しい、それによって、その項目の内容にジェンダーがどう関わっていたのかが見えてくるはずである。

ドイツで出版されている歴史書の中には、ジェンダー史として書かれたものでなくとも、シナイスツァ、ナシヨナリズム、軍隊、宗教などを取りあげながら、機軸をつくりだす力として、また歴史の推進要因としてジェンダーを重視し、それらの歴史とジェンダーとの関わりを叙述のなかに含めるものが増えている。私は女性を孤立して扱うことのマイナス面を指摘してきたが、そのような要因は、ともしれば女性やジェンダーで自己完結しがるジェンダー史の側にもある。今、ジェンダー史に求められていることは、ジェンダー以外の歴史の動きとの関連を強め、もつ歴史全体に開いていくような形の歴史叙述を心がけること、さらにジェンダーの視点による歴史像の歪みを具体的に示していくことだと考えている。

(ひめおかとし) 東京大学教授

る。頻発する外国船の接近やアヘン戦争で中国の敗北(一八四二年)に、諸大名は危機感を抱いていたのであり、欧米の軍事書や技術書の翻訳は飛躍的に増加していた。幕府も安政二年(一八五五)には国防教育と情報収集のための洋学所後の蕃書(関所)を開設している。西洋近代の科学技術への進んだ理解が求められるようになっていたのである。ここで言う「西洋近代の科学技術」とは、物理学や化学によって基礎づけられ、大規模な生産や広域的な運輸と通信に供される機械装置に体现されているところの技術を指す。当時の日本にとってその意味での「科学技術」は、幕永六年(一八五三)に来航したペリイ艦隊の蒸気船艦隊そのものによって、あるいは翌年にペリイが幕府への贈答品として持参した蒸気機関車の模型とモルリス式電信機によつて、象徴されていた。

蒸気機関の改良で知られるジェイムス・ワットは、職人あがりの起業家であり、学者ではない。しかしワットはグラスゴウ大学の実験機材の修理を仕事としていた関係で、大学の学者とも親交があり、学問的なレベルで蒸気機関の改良を進め、一八世紀後半に蒸気機関の実用化と企業化に成功した。その後一八世紀になって、蒸気機関のさらなる改良、そして蒸気船や蒸気機関車への発展的应用が進められ、他方で、一八四〇年代には蒸気機関の原理的根拠としての熱力学第一法則と第二法則が確立され、こうして物理学(力学と熱力学)に根拠づけられた「科学技術」としての蒸気機関が誕生した。つまりペリイ来航の時点では、蒸気機関は、きわめて複雑で精巧なメカニクスを有す

幕末に開国した日本の、その後の明治政府による「殖産興業・富国強兵」路線を物質化した近代科学技術の移植がそれなりに「成功」したこの背景として、江戸時代の蘭学・洋学の蓄積が暗られている。ただしにそのことは否定できないが、しかし江戸時代の蘭学や洋学が明治における科学技術に繋がるために、その内容においても、その普及という点でも、大きな転換を要した。とくにその大衆化をもたらしたのが「窮理熱」すなわち西洋科学技術の啓蒙書出版ブームであった。そもそも蘭学・洋学と言っても、一九世紀中期以降とそれ以前とは異なる。もともと蘭学はごく一部の知識人にとつての学習や研究の対象であり、実用としては天文学や地理学の曆法や地図製作への応用が、あるいは医療における医学や本草学にほとんど限られていた。他方で技術はと言うと、その大部分はいわゆる蘭癖大名や裕福な商人の高級玩具のレベルに留まっていた。応用物理学的な複雑で精密な機械やその基礎にある物理学それぞれ自体への理解、あるいはそれを使用するための産業的な知識はほぼ皆無であった。

しかし一九世紀中期になると洋学の変容が促されることにな

山本義隆

文明開化の窮理熱

るばかりか、高いレベルの物理学理論で基礎づけられた、当時の最高度の汎用的科学技術であった。同様に電信機もまた、一九世紀前半に発展した電磁気学の最初の技術的応用であり、当時の最先端ハイテク技術であった。

しかしある程度のことば、この頃の日本の支配層には知られていない。安政元年(一八五四)の「遠西奇談述」には二種類の「伝信機」の記述がある。一八六〇年から翌年にかけて日本を訪れたドイツの地理学者リトホフマンの「日本滞在記」には、蕃書閣所の役人が電信機についての知識を有していたことが記されている。ペリイの「日本远征記」には「日本の役人たちは、蒸気船の構造や準備に関するすべてのことに知的な関心を示した。蒸気機関が動いている間、彼らはあらゆる部分を詳細に検査したが、怖がる様子はなく、蒸気機関にまったく無知な人間から予想されるような驚愕も見られなかった。彼らはすぐに蒸気機関の性質を見抜いたらしく、蒸気を利用して大きな機関を動かす方法や、蒸気の方で蒸気船の水輪を動かす方法についても洞察しようだつた」(ペリイ監訳「日本远征記」上、オプティス宮崎編訳、万葉舎、二〇〇九年)とある。

とはいえ「銀国」体制下の当時の日本で、電信機についてこれなりに知識を有し、あるいは蒸気機関にたいしてこのようにクリアルに反応できたのは、上流階級(士族)のそれとごく限られた知識人だけである。大衆は、蒸気機関や電信機はもとより、洋学そのものとおおよそ無縁に過ごしてきた。それまで動力としては人力と畜力のほかにはせいぜいが水力と風力くらいしか